

百科全書家・科学者 ロモノソフ

岸本文男（鉱床部）

ソ連の63を数える総合大学のうち 世界にもっともよく知られているのはいわゆるモスクワ大学であろう（第1図）。その正式の名は「ロモノソフ名称モスクワ国立大学」（Московский Государственный Университет имени Ломоносова 略称 МГУ）である。己れの姓を祖国の最高の総合大学に付せられている人物 それが本稿の主人公である。

ロモノソフ 名前はミハイール 父称はワシーリエビチ 姓は正しくはラマノーサフ（Михаил Васильевич Ломоносов）（第2図）。ラマノーサフ家のワシーリーの倅ミハイールの意である。

ソ連科学アカデミーが「世界的レベルの学識を備えた最初のロシアの自然科学者・百科全書家 多方面にわたる関心と才能をもった人物 物理化学の創始者の1人 現代ロシア語文語体の基礎を確立した詩人・文学者 歴史学者 ロシアにおける自然科学の自立と発展・啓蒙につくした斗士」と絶讃を惜しまない M. ロモノソフは自前の漁船で漁業を営むかたわら 農耕にも従うというドビナ河沿岸農民の子として アルハンゲリスク県ホルモゴレイ町に近いクロストロボ郷デニソフカ村（現ロモノソボ町）に生れた。1711年11月8日のことである。実は彼の出生地・誕生日・死亡日については異説もないわけではないが 1974年発行の「ソビエート大百科事典」

第15巻の記載が最新の資料なので それを採用した。父親は ワシーリー ダラフエーエビチ ラマノーサフ（Василий Дорофеевич Ломоносов）という。

少年時代

M. ロモノソフが生れた土地を含めてロシアの北辺は特殊な歴史をたどり 「タタールのくびき」も「大地主の土地占有」も知らず スピッツベルゲン島や北氷洋のシベリア沿岸水域まで舟を出した勇敢な船乗りたちの故郷であり 海外からの文化が加って文化程度は比較的高い地方であった。

彼は父親に連れられて白海や北氷洋にも出漁し その航海によって生来の頑張り屋に磨きをかけ 一方読書に熱中し 14才のときに L. F. マグニツキーの「数学教程」や M. スモトリツキーの「スラブ語文法」を独学で「あげた」ほどの勉強家でもあった。向学心がつのればつるほど 中央の文化・学術に夢がとび 彼が漁民や農民であるよりも学者であることを望んで 一大決心をしたのは18才の春であった。

学を志して

1730年の夏を最後の家業に費した M. ロモノソフは家を棄て 12月の雪のデニソフカをあとにして 徒歩でモスクワに旅出た。北辺の生地のきびしい環境がそう



第1図
レーニンの丘にそそり立つモスクワ大学。1952年に旧市内から移転した48階建ての近代建築である。



第2図 ロモノソフ（肖像画より）

させた主張する研究者もいるし 彼の知識への欲求が人なみはずれて強かったからだと説く研究者もいる。ともあれ 頑張り屋 M. ロモノソフ青年の学問へのひたむきな生活が始まった。

当時のロシアは貴族社会で身分差別がひどく 半農・半漁の民の取り扱いが農奴とそれほど変わらず 学問などは身のほど知らずとばかり 相手にしてくれる専門学校・大学はあるはずがない。彼は生活の知恵というか一計を案じ 服装を整え 貴族の息子になりすまして 1931年1月 ザイコノスパスキー修道院付属スラブ・ギリシア-ラテン アカデミーに入学することに成功した。この学校生活を回想して

「ザイコノスパスキー学校で学ぶに当って 私はあらゆる面から科学にそむく努力を強制され その強制は当時うちから得ないほどの力をもっていた。……1日の手当は3 コペイカの銅貨1枚だけで 一日に半コペイカのパンと半コペイカのクワスよりも多く摂ることはどうしてもできなかった。ほかに紙や靴や日用品を買わねばならなかったし このようにして私は5年間を過ぎたが でも科学を放り出しはしなかった」と書いている(選集 第8巻 p.124-125) (第3図)。

1736年の初め M. ロモノソフはもっともすぐれた生徒の1人としてペテルブルク科学アカデミー付属大学に推薦され 同大学に入学のためペテルブルク(現レニングラード)に行き その年の秋 同大学から化学と冶金学の教育を受けるためにドイツに派遣された。彼は有名な物理学者であり哲学者であった K. ウォルフの指導を受けて当初マールブルク大学で学び それからフライベルク大学で化学者・冶金学者 I. ヘンケルに学んだ。このドイツ時代にヘッセンやエルツ=ゲビルゲ ボヘミアやハルツで 彼は初めて野外地質や炭田・金属鉱床・岩塩鉱床に接している。彼は帰国後 1749年に歴史学者(元アストラハン県知事) V. N. タチシチェフに出した手紙の中でこのドイツ留学のことに触れ

「私の主な仕事は鉱山科学の分野です。そのため意識的にサクソニアに派遣されました」

と書いている。

さて M. ロモノソフは 1741年の暮に急ぎ帰国するよう命ぜられ 1942年1月にペテルブルクに着き 母校ペテルブルク科学アカデミー付属大学の物理学科の助教授に指名された。

教育と科学研究の日々

当時最新の知識と理論をもつての母校での物理学教育は順調に進展し 科学アカデミーの彼に対する評価は日々高まり 1745年8月 M. ロモノソフは 33才と9ヶ月

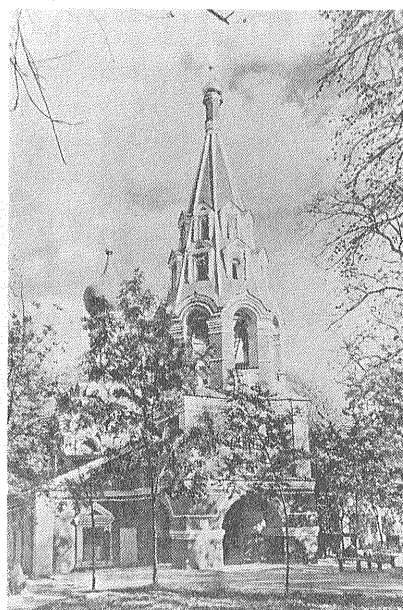
で科学アカデミー正会員に推挙され 同時にロシア人最初の化学教授の職に選ばれた。

彼の科学アカデミーでの活動はきわめて多面的であった。M. ロモノソフは1746年に K. ウォルフの「実験物理学」の要約を翻訳・出版し 同時に初めてロシア語での物理学の公開講座を開いた。奇異に思われるかも知れないが 外国人の学者が自国語で講義していた当時のロシアでは自然科学の公開講座がロシア語で行われるのは初めてのことだったのである。彼の「ロシアにおける科学の自立」の主張の1つの具体化ではなからうか。さっそうたり ロモノソフ。たとえ貴族の出でなかろうと。

さらに1748年には 彼の主張にもとづいて 実質的には彼のためにロシア最初の化学研究所がペテルブルクに開設された。この研究所の開設は M. ロモノソフの科学活動の歴史の1時代を画するできごとで 彼の科学活動はこの研究所開設までの主として化学と物理学に没頭した時代 その開設から後進に道をゆずった1753年間の主として化学研究で過ぎた時代 それから亡くなるまでのあしかけ13年間の自然科学と応用科学の幅広い分野で活動した時代 の3期にわけられよう。

才能豊かに

M. ロモノソフは 科学的な研究に從事しただけでなく文学にも関心を持ち 幾つかの頌詩や悲劇シナリオも出版している。彼はその強い愛国心から多くのロシア史の史料も詳しく研究した。



第3図 ドンスコイ・ノボデビチー修道院。ロモノソフが学んだ学校もこのような修道院に付属していたのであろう。

ロシアに帰国してから高等教育にたずさわりながら自分自身の学問への途上に立ちふさがった貴族社会の壁への怒りをさらに深め M. ロモノソフは国民全階層に門扉を開いたヨーロッパ型の大学の必要をその創設を訴え そのために奔走した。彼の努力は実り 1755年彼の主張と計画通りの総合大学がモスクワで開校された。モスクワ大学の誕生 4月26日。このときの学部構成は哲学部 法学部 医学部の3学部で 神学部がないこと 雑階級の子弟も全く差別されなかったことは画期的であった。だが 農奴の子弟は農奴が解放される十月革命の1917年を待たねばならなかったが。彼は初代学長に就任したが 大学の基礎と運営が定まると席を辞し 科学アカデミー正会員としての研究と創造 彼の才能の花開く生活に帰った(第4・5図)。

M. ロモノソフは学長を辞するや ペテルブルク近郊のウスチホルジツァフに工場を建設し始めた。長い月日がかかったそうだが 彼はそこで色ガラスの製造技術を開発して工業化に成功した。その製品はモザイクに用いられ 彼はロシアのモザイク芸術の発展に非常に大きな貢献をなした。彼自ら多くのモザイクの人物像や壮大な画を作ったが 有名な「ピョートルI世の画像」と約4.8×6.44mもの「ポルタワの戦い」はその代表作で 後者はソ連科学アカデミーの「レニングラードの家」を訪れる外国人学者の目を奪うかのように 製作した1762—64年当時のまま今もあでやかに保存されている。彼のモザイク芸術はロシア芸術アカデミーで高く評価され 1763年にロシア芸術アカデミーの正会員に推挙されて 以来その正会員でもあった。

M. ロモノソフはその学者となって以来の生涯を通じ

ロシアの生産力の発展に方向を与え きわめて多様な最高の国家的な科学政策 技術政策 文化政策の首唱者であった。しかし 封建農奴制の下では彼の多くの「国営企業案」は実現し得なかった。

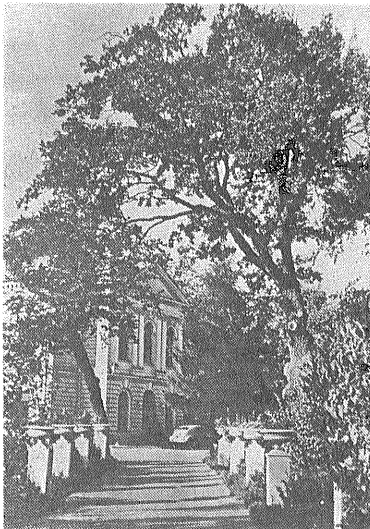
晩年になって 彼の科学研究は国外でも評価されるようになり スウェーデン科学アカデミーの名誉会員(1760年)に 次いでポロニア科学アカデミーの名誉会員(1764年)に選ばれた。

1765年の春になって M. ロモノソフは風邪をひきそれがもとで4月4日にその生涯を閉じた。享年53才。レニングラードのアレクサンドル=ネフスキー大修道院のラザレフ墓地に葬られた(第6図)。

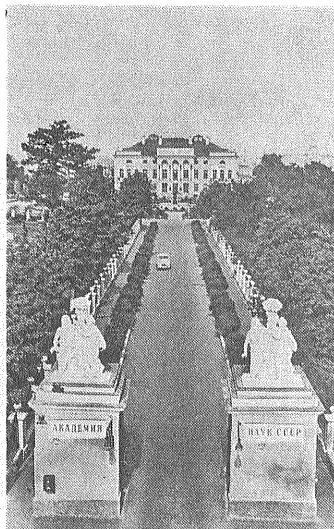
物理学と化学の分野で

M. ロモノソフの業績を紹介する筆頭に まず物理学と化学をあげてみよう。

彼の物理学と化学に関係した科学研究は物質の原子と分子の構成に関する概念に基礎をおき 17世紀に発展した方向 第一に R. ボイルの方向を受けついでいる。M. ロモノソフは一連の「微粒子論」すなわち原子—分子の概念にもとづいて 物理学と化学を調和のとれた一つのものに総合した論文を書こうと思った。彼のこの壮大な計画はうまく運ばなかったが 彼が書いた物理学と化学の研究論文の大部分はその大論文への準備資料と考えるべきものである。M. ロモノソフは物質のあらゆる性質がいろいろな純粋に機械的な微粒子 原子からなる微粒子の運動に関する概念にもとづいて完全に説明しきれると推定した。したがって 彼の理論には 焰・光・熱の物質や特殊な物質(エーテル空間を満た



第4図 古いモスクワが今ものこっている。その一隅



第5図 ソ連科学アカデミーの建物(モスクワ)



第6図 ロモノソフの墓

す物質を除いて)なるものが導入されていない。このような M. ロモノソフの概念は18世紀に広まっていた誤まった見方を正すものであった。17世紀にすでに成功裡に発展し 18世紀初頭に D. ベルヌリによって完成されていた熱の分子力学論が M. ロモノソフの時代には熱素理論にひたりきった人々によって完全に見すてられていたのである。M. ロモノソフは「暖・冷の原因に関する考察」(1744)の中で当時の実験資料を綿密に分析し熱素理論批判の有力な論拠を開陳し 熱が物質の粒子の回転運動に原因するという仮説を立てた。この仮説は19世紀になって 気体の運動力学理論を組立てる最初の試み(G. デイリー：J. P. ジュール)の中で効果的に活用されている。

M. ロモノソフは分子運動力学論にもとづいて 物質の保存と運動の哲学的な原理を提起して

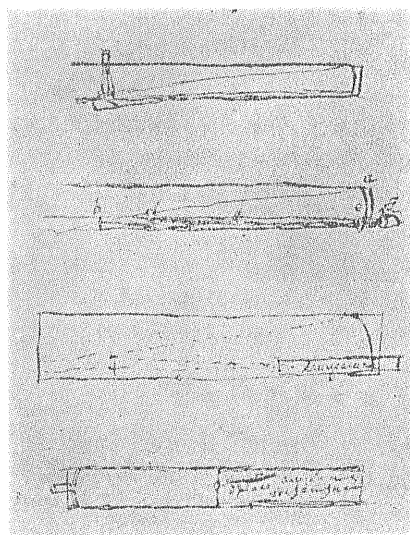
「……自然界で生ずるあらゆる変化は或る物体の粒子が失なわれる分だけ 別の物体に粒子がつけ加わり……この普遍的な自然法則はまさに運動の法則にも拡大できる。何故ならば 自体のエネルギーで別の物体を運動させる物体は運動する物体に伝えるエネルギー分だけ自己のエネルギーを失う」(全集 第3巻 p.383)と著わしている。彼は物質保存の法則と運動の法則を基本公理と考えた。

M. ロモノソフは 当時支配的であった「火の物質」に関する理論の破産を説くため 金属物質を入れて密封したガラス容器を火で熱してすぐに開いてからその容器全体の重量を秤り その重量がふえているのを確かめ さらに灼熱後も密封したままの重量を測定し R. ボイルの「火の物質」(フロギストン)がガラスを通して浸透したために重量増となったという見解に反論して

「周知の R. ボイルの見解は間違っている。何故なら外の空気が入らなかつたら 焼かれた物体全体の重さはもとのままだからである」(全集 第3巻 p.563)と述べている。当時の化学者と違って 彼は化学作用の要素から「火の物質」をとり去った。その後さらに密封容器中に生じた「金ごけ」が出発金属物質よりも重くなっていることを認めた M. ロモノソフは「空気を抜いた容器」中で金属物質を灼熱する実験を繰り返したが 当時の真空ポンプが不完全なものだったため 事実上の真空を与えてくれず 彼は燃焼過程と「金ごけ」生成作用の性質を実験的に証明することができなかった。

M. ロモノソフの理論化学はすべて物理学の到達点に立脚していた。彼は次のように書いている。

「物理化学は化学的操作時に混合物中で生ずる物理状態と物理実験を基礎とした科学であり……」



第7図 ロモノソフの反射望遠鏡のスケッチ。彼自身が画いたもの

(全集 第2巻 p.483 第3巻 p.241).

彼が物理化学の創始者の1人といわれる理由はこの辺のことにある。1752—1753年に M. ロモノソフは化学教授として学生たちに「真正物理化学入門」を講義し 同時に実験も指導した。そして 彼は溶液の性質を研究する幅広い計画を立て 各種の温度下での塩の溶解度(水)や温度低下時における溶液の時間的変化についてのデータを集め 保存していた。さらに彼は化学物質の物理的な研究のための機器として 粘度計 屈折率測定用レフラクトメータ 硬度計を独自に開発し その設計図はロモノソフ博物館に今も保存されている。

M. ロモノソフは G. V. リフマンと一緒に「原子電気」の研究にかなりのエネルギーを注いだ。二人はそのため「雷電機」という特殊な機械を開発して 定量的な測定実験を行った。リフマンが1753年に落雷で死んだ後も リフマンの非業の死を「神のむくい」と思いこんだ神父たちの妨害を排しながら M. ロモノソフはその研究を続けた。だが 彼は電場についてそれが空間エーテル粒子の回転運動に起因するものと推論し 物質中の電荷の存在を否定した。このような概念はとくに避雷針の役割に対する彼の評価を誤まらせることとなったのである。

光学分野における M. ロモノソフの重要な発明の一つとなったのが日暮れでも物体をはっきり観察することのできる彼の「暗視筒」(1756—1758)であろう。そのほかハーシェルよりもずっと前に補助平面鏡のない反射望遠鏡を作っている(第7図)。

天文学と地球物理学の分野で

M. ロモノソフは別に遊びで反射望遠鏡を作ったわけではない。天体に興味をもったからである。彼は1761年5月26日 金星の太陽面通過時に観測した現象すなわち太陽面の縁を金星が通過するときの太陽縁の変化から金星に気圏があることを発見したが 今では金星へのロケットによって立証されている。

地球物理学の分野では M. ロモノソフは振動方向と振幅のわずかな変化でも測定できる振子を組み立て 地球の引力を長期にわたって研究し 論文も書いた。

地質学と鉱物学の分野で

M. ロモノソフがロシアにおける地質学と鉱物学の発展に深い関心を持ち 積極的に活動した証拠はたくさん残っている。今までに触れたことは除いて 彼自身が多数の岩石・鉱石・土壌などを分析したこと 野外観察とその試料の分析結果にもとづいて土壌・草炭・石炭・石油・琥珀の生物起源説を提唱したこと 地球の南極に大陸が存在するという有力な証拠をあげたことは 当時としては地質学へのすぐれた貢献であったが それにもまして活目すべきことは 著作「地球の揺動による金属の生成に関する知見」(1757)と「地球の層について」(1750年代に脱稿 1763年に出版)の中で自然界の法則的な進化という概念を明らかにし そして現在主義にもとづく方法論を地質学に実際に導入したことであろう。M. ロモノソフの考え方の基調は彼自身の主張 すなわち

「いたずらに多くの人々には目に入るすべてのものが最初から造物主によって創造されたものと考え……」

そのような考え方はあらゆる科学の成長にとってきわめて有害であり……」(全集 第5巻 p.574—575)にはつきり著わされている。

当時の自然科学が現代のようにまだ分化していなかった反映として 彼の名著「冶金と鉱業の第1原理」(1742年執筆 1763年出版)(第8図)は現在の地球化学と結晶学の領域に始まり 金属の熱加工と冷温加工に終わる(および有用鉱物の探査・採掘・製練に関わりのある)すべてのことを統一的にとり扱っている。この書は当時としては破格の発行部数 1,225部を数えるベストセラー中のベストセラーとなった。さらに彼は1763年に「鉱物コレクション計画」と「記載ロシア鉱物学報告」も出版している。

さて M. ロモノソフの地質学哲学が自然界の法則的進化論にあることはすでに述べたし 彼の「地球の層について」から引用もした。さらに彼の地質学における先導性について言えば 第1に地質学的研究への化学・物理学・数学の導入を力説し 試行したこと 第2に地質作用を内部作用(inner process)と外部作用(outer process)に分け とくに後者の特徴を画き出したこと 第3に過去の地質時代の海洋水盆に堆積することによって成層堆積岩が生成したと正しく説明していること 第4に海進と海退の交互繰り返しという概念を提起したこと 第5にその海進と海退の原因を大陸の長周期変動地震 構造運動に求めていること 第6に火山活動と造山作用とを結びつけたこと 第7に岩石の2次変質として高温・高圧下での岩石の変成について記載したこと 第8に化学反応と分子の摩擦によるとしたとはいえ 構造運動の原因を地球の内部エネルギーにあると説明していることなどがあげられる。

鉱床学の分野での M. ロモノソフの研究結果は V. I. スミルノフの「新版鉱床地質学」(渡辺武男監訳 日本語版1976年 ラティス社発行 p.15—17)に詳しいのでここでは簡単に個条書きであらわしてみよう。

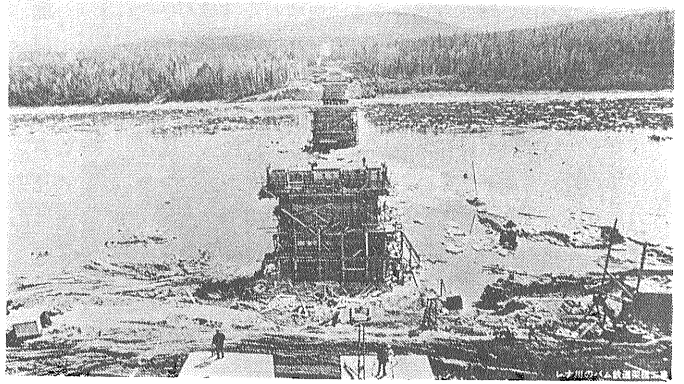
第1に鉱床全体を4区分(鉱脈・水平鉱層・のう状鉱床・地表鉱床)したこと 第2に岩塩を海水起源と考えたこと 第3に石炭を泥炭の炭化生成物と解したこと 第4に石油を植物の地熱の乾留生成物としたこと 第5に金属鉱床を脈状鉱床・地表堆積鉱床・地表漂砂鉱床に分けたこと 第6に漂砂鉱床と脈状鉱床とを関係づけたこと 第7に鉱石の表成富化現象を記載したこと 第8に鉱床生成後の断層運動現象を正確に把握していること 第9に金・銀・鉛・錫・銅・鉄・アンチモン・砒素・ビスマス・水銀の各鉱石の特徴を詳しく描いていることな



第8図
ロモノソフ著「冶金と鉱業の第1原理」(1763年出版)



第9図 ロモノソフの期待は今実現されつつある。西シベリアのオビ河中流域での石油開発はすすむ



第10図 開発の波は東シベリアから極東へ押しよせる。バイカルーアムール鉄道は世界の今世紀最大の建設事業である。

どである。

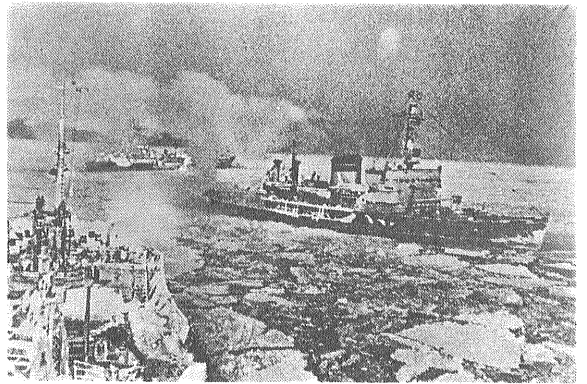
だが M. ロモノソフはマグマについて記載していない。火山活動と造山作用を関係づけているのに 銅やアンチモンの鉱石を当時としては最高に詳しく検討しているのに マグマ源鉱床とみられるような記述がない。彼が記載しているものについて言えば 驚くほど正確である。したがって 彼を単純に水成論者にしてしまうのは惜しいが 現在からみれば どちらかと言えば水成論者に入ってしまう。

なお M. ロモノソフの採鉱学上の功績として 坑道内での空気の自由運動の物理学的条件を把握し 通気問題の解決に貢献しただけでなく 強制通風せずに作動させる熔鉱炉にも適用したことをあげておく。

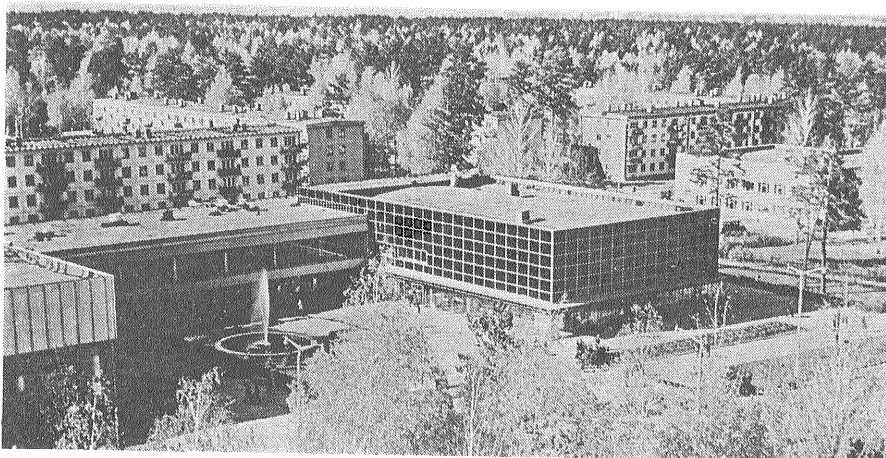
地理学の分野で

1758年に M. ロモノソフは地理局 歴史学会 大学科学アカデミー付属中学校の各「視学」に委任された。

そのうちの地理局の主要務は「ロシア地図集」を編纂することにあつた。彼は地理調査機関の協力を得て また国内各地に特別な調査アンケートを送り その回答を処理することによって「ロシア地図集」を編纂しようとする。



第11図 ロモノソフの北氷洋航路開設の夢は実現した。彼の故郷の海を東に進む北氷洋船団



第12図 ロモノソフの投じたロシア科学の自立への一石は ここ「アカデムゴロドーク」に花と開きつつある。

考え 多くの自然地理の資料や経済地理の資料の入手に成功したが 広大なロシア全土をおおうには不十分で 実際に「ロシア地図集」を完成することはできなかった。しかし 彼の社会的・政治的な性格をもった卓抜した論文「ロシア諸民族の保存と増加について」(1761)はこの作業の中から生れたもので 彼はその論文でロシアの人口増を国の生産力発展への急務とし 出生率の上昇 新生児・幼児の保護 外国人のロシア国籍付与をめざす一連の立法案と社会福祉政策を提起している。

さらに M. ロモノソフは新しい緯度・経度測定法と測定器を考案し 1759年の論文「水路の精度向上論」に発表した。彼はさらにこの著作の中で 航海上のもっとも重要な科学技術的な問題を共同して解決するための国際航海者アカデミーの創設を提唱している。この提唱は世界で初めてのことであった。彼自身も今もって船員たちがもっとも恐れている海氷について研究し 世界最初の海氷の分類を行なった。

また 彼は北氷洋航路の開設がロシアにとって政治的にも経済的にも重要なことを繰り返して強調し 1762—1763年に「北氷洋を通る各種の旅行概要とシベリア海からインド洋への出入可能航路の証拠」を書き 1764年になってこの論文に「海軍将校」に対する彼の「模範的な」指示のついた「シベリア海を通る東方への北航路について」が追加されている。現在でも引用されることの多い彼の名言

「ロシアの力はシベリアによって増大するだろう」は前者(1762—1763年)に記されたもので 今日のバイカル＝アムール鉄道建設につながる先駆の言となったと言ってもおかしくない(第9・10・11・12図)。



第13図 ロモノソフが1760年に発表した「系譜つき簡略ロシア年代記」

歴史学の分野で

M. ロモノソフはすでに1749年にはロシア史学者としての地位を得ていたが 彼がロシア史の系統的な研究を始めたのは1751年からのことで 古文書の実物を蒐集しながら 「ロシア民族の始まりからヤロスラフ I 世大公の死去まで ないし1054年までの古代ロシア史」(第1・2部) を書き(1766年出版) それに先立つ1760年にはピョートル I 世の時代までの重要事件を列挙した 「系譜つき簡略ロシア年代記」(第13図) を出版している。

また M. ロモノソフは ロシア民族独自発展説を否定するノルマン説の批判者として注目された最初の人である。しかし 彼は歴史の中での人民大衆の大きな役割を認めてはいるが 当時のすべての自然科学者や唯物論者と同じように 理想主義的な見地を歴史の分野に残し 歴史上の人物の活動を重視していた。

科学と教育の自主独立のために

M. ロモノソフは科学アカデミーでの活動の当初から教育制度の拡大と改革のために奮闘した斗士である。貴族の子弟でなくては高等教育が受けられないだけでなく 中等教育さえ保証されない制度に対する彼の怒りは激しかった。1757年 科学アカデミー事務局顧問に指名されたことを機に 彼は科学アカデミーの改革計画と詳細な定款改正案を作製し あるいは 外国から招いた著名な学者たちのおかげでヨーロッパの科学の中心となっていたペテルブルグ科学アカデミーがロシア独自の科学の創造についてあまりにも無関心なことに対し精神的に対策をこうじたが 宮廷社会とアカデミー界の強い妨害を受け 彼の多くの先進的な構想も握りつぶされたりひきのばされたりして ペテルブルグ大学(現レニングラード大学)の開校にしても彼の死後54年もたった1819年にやっと陽の目をみるに至ったのである。

先に述べたモスクワ大学の創立は彼の教育の理想を具現して民主的内容を備え 俊秀が続出し 二月革命にも十月革命にも大きく貢献したことは史家のこぞって認めるところである。

文学と詩の世界で

M. ロモノソフはロシア文学の改革者として文芸作品の中に出てくる。たとえば V. G. ベリンスキーはその文芸評論の中で彼を「ロシア文学のピョートル大帝」と呼び 政治改革の英主ピョートル大帝になぞらえて彼を讃えている。詩人としての M. ロモノソフの新しい試みはロシア文化 ロシア民族作品の伝統に根ざしたもののだが 1735年に V. K. トレジアコフスキーが提唱したロシア詩作詩法の変形に対して その非論理性につき

ロシア詩作詩法の一定の音節数と力点の規則的な配置というシステムを確立し「ロシア詩作詩法の法則に関する手紙」(1739年執筆 1778年出版)の中で理論的な根拠を明らかにしさらに彼自身の詩作が実際にその作詩法を現わしてみせている。

彼は頌詩を愛しそれを科学思想と社会的・愛国者の理念を啓蒙する手段ともしていた。彼の哲学的な頌詩をA. S プーシュキンは高く評価しただけでなく感きわまって

「ロモノソフはそれ自体一個の宇宙である」

とまで讃えている。M. ロモノソフが頌詩に世界の文学の中で高い市民権を与えしめたことは確かである。彼の頌詩の代表作は処女作「ホチーンの占領へ」(1739年作詩 1751年出版)と「夕べの思い」(1748年出版)であろう。彼のいろいろな詩の中でとくに面白いと思われるのはピョートルI世についての表現で1740年代の頌詩では抽象的に象徴化した英雄像が画かれているのに対し晩年にはたとえば物語風の未完の詩「ピョートル大帝」(1960年)にみられるように啓発な君主の具体的な歴史上の人物としての表現に変えている。

またM. ロモノソフは田園詩 寸詩などのジャンルの開拓にも大きな役割を果しており悲詩「タミラとセリム」(1750年)や同じく「デモフォント」(1752年)は当時の人々をうならせ反動的な神父に対する皮肉にあふれた詩「青二才のあごひげに」(1757年)は広範な人々の口にのぼったと伝えられている。

作詩法の慣例の理論的な根拠を明らかにする努力の中から1748年にM. ロモノソフは「修辞学入門」という一書を著わした。そしてその中で彼は文体の正確さを左右するのがロシア語の文法と生きた言葉の徹底的な研究にあると主張しさらにロシア語を讃えてヨーロッパ各国の言語には一つもない「生れながらの豊かさ 美しさ 力強さ」を備えた言葉だと書いている。後のことは彼がラテン語 ギリシア語 ドイツ語 フランス語に明るく当時のスラブ語も理解していた中でのことではあるが一つには彼の愛国主義の発露なのだろう。一方そのように祖国の言葉を愛していたからM. ロモノソフは歴史にのこる一書「ロシア語文法」(1755年脱稿 1757年出版)を著わしたとも言える。

彼がまとめた文法はロシア最初の真に科学的なロシア語文法でそれが十月革命後に改革・簡略化されるまでの標準語の基礎となった。彼はまた語の変化の現代語形態(もちろん当時の)にも触れている。

さらに彼は1758年に現在彼のもつとも円熟した文献

学的著作と評されている「ロシア語宗教書の効用に関する序文」を書いた。この本では3つの問題すなわちロシア語文語構成の中での教会用語(スラブ語)とロシア語の要素の組合せ 文語体の境界 ジャンルの分類という3つの問題が解決されている。M. ロモノソフはこの書をまとめるに当たってロシア語文語体の中には教会スラブ語から言葉として理解できるものだけが残っていないとはならないこと 文献から多年にわたって実際に使われる過程で人々に活用され 実際とは違った意味を現わす方が都合のよかった語だけが保存されているはずであること ロシア語の主要構成成分となるべきものは文語と口語であること の3つの仮説をたてている。見ごとではないか。ここまでくればもはやプーシュキンならずとも 讃辞を呈せずにはすまされない気になるだろう。

M. ロモノソフの自然科学分野の著作や翻訳の中に使われている用語で一つ付言しておきたい。彼は外来の学術用語をロシア語翻字ですますやり方でなくロシア語化に徹底していた。翻字とは「カタカナ書き」のようなものでそれを彼は嫌ったのである。

思考の基本

M. ロモノソフは科学的唯物論の支持者であった。彼は自然界のあらゆる現象が力学的な性質を備え力学の諸法則にしたがうと主張し続け 当時のほかの人々と違って自然界の一定・不変という形而上学的な見解を受けつけず自然界におけるあらゆる自然作用の進化と宇宙・地殻の漸進的な変化をその持論とした。そのためM. ロモノソフは宗教界と対立し 激しい論争をくり返し 神父僧侶の無知をあばき 科学と宗教の混同に最後まで抵抗していた。

彼を記念して

M. ロモノソフの科学的創造とその生活の数々は現在ソ連内外の学者の研究対象の一つとなっている。ソ連科学アカデミーは管下の自然科学・技術史研究所とくにロモノソフ博物館(レニングラード)を付設して研究の便に供し 1956年から2種のロモノソフ金牌を定めて自然科学と社会科学の分野のすぐれた業績に対するソ連科学アカデミーの高位の賞としている(1はソ連の学者用 1は外国の学者用)。

M. ロモノソフの名は町名などにとどめられ 彼への憧憬は今も生きつづけている。レニングラード州のロモノソフ市 ノーバヤゼムリヤ島のロモノソフ山脈 太平洋のロモノソフ海流 北氷洋のロモノソフ海嶺 西スピッツベルゲン島のロモノソフ丘陵……と。